

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02587

研究課題名(和文) 20世紀後半のフランス文学におけるワーグナーの影響とその超克

研究課題名(英文) Wagner's influence and its overcoming in French literature in the second half of the 20th century

研究代表者

三ツ堀 広一郎 (MITSUBORI, Koichiro)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：40434245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：《ヌーヴォー・ロマン》の騎手アラン・ロブ=グリエの創作(特に《ロマネスク》三部作)がワーグナーの楽劇(特に《ニーベルングの指環》)と持っている関係を究明した。また、ジュリアン・グラックのエッセーや小説作品(特に『森のバルコニー』)に焦点を当てながら、この作家におけるワーグナーの影響を跡づけた。そうすることで、20世紀後半、すなわち第二次大戦以降のフランス文学における「ワグネリズム」の特徴を明らかにした。さらに、関連するフランス語書籍を翻訳刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半のフランス文学へのワーグナーの影響は、従来あまり顧みられることがなかったが、これを比較文学的な視座から跡づけた。とくにジュリアン・グラックとアラン・ロブ=グリエの著作に焦点を絞り、彼らの特殊性に応じたワーグナー受容のありかたを究明した。同時に、フランス19世紀末以来の文学的ワグネリズムの伝統のうちこれら作家たちを位置づけなおし、その継承と断絶の両側面を明るみに出した。ワーグナー受容というプリズムを通して、上記の作家に代表される戦後フランス文学の特徴を、時代性と地域性とは関連づけながら照らし出した。

研究成果の概要(英文)：This research explored the relationship between the creations of Alain Robbe-Grillet(especially the "Romanesque" trilogy), leader of the "Nouveau Roman" and Wagner's musical dramas (especially "Der Ring des Nibelungen"). It also traces Wagner's influence on Julien Gracq, focusing on his essays and novels (especially "Un balcon en forêt"). By doing so, this study clarified the characteristics of "Wagnerism" in French literature in the latter half of the 20th century, that is, after World War II. In addition, related French books have been translated and published.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ワーグナー ジュリアン・グラック アラン・ロブ=グリエ ニューヴォー・ロマン 第二次大戦 引用

1. 研究開始当初の背景

フランス文学、とくに 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのそれが、ワーグナーの大きな影響のもとに展開されたことは、つとに知られるとおりである。とりわけボードレールを嚆矢とし、マラルメによって高みにまで引き上げられた象徴主義文学は、ワーグナーの芸術を創作の糧とすると同時に、特異な詩学や文芸理論の礎ともした。またマラルメを師と仰ぐ新旧の詩人たちを糾合して刊行された『ワーグナー評論』誌(1885-1888)は、ワーグナーの芸術理論の紹介と解釈を表看板にかかけながら、象徴派詩人たちの機関誌としての役割を担っていった。さらに 20 世紀になると、マルセル・ブルーストやポール・クロデルを筆頭に、ワーグナーの作品に深甚な影響を受けながら創作活動を展開した作家は数多い。

こうしてフランス文学では、19 世紀末以来のワグネリスムの伝統が 20 世紀前半に至るまで連綿と続いていることが認知されている。したがって、この時期のフランス文学とワーグナーの関係については、各作家の専門研究者が詳細に跡づけているほかにも、実証的方法によるものから文化史的アプローチによるものまで、質量とも充実した総合的研究がある。また一方で、近年も、哲学者のフィリップ・ラクー＝ラバルトやアラン・パディウが、ワーグナーがフランスの美学思想に与えた影響を論じるなど、ワグネリズムはフランス思想史を解明するうえで重要な課題になってきている。

しかし、20 世紀後半のフランス文学においてもワグネリスムの伝統が受け継がれ、第二次大戦 とくにナチズム の惨禍を経ることで思想的な批判にさらされながらも、実作面でワーグナーは注目すべき影響をとどめていることは、閑却されがちであった。具体的には、20 世紀フランス文学における最大のワグネリアンであるジュリアン・グラック、《ヌーヴォー・ロマン》の領袖アラン・ロブ＝グリエのいずれにも、それぞれの文学的立場に相違はあれ、ワーグナーの強い影響が認められる。そして、この観点からの研究は、これまで皆無だったわけではないが、手薄であったことは否めがたい。

私自身は、本研究課題に着手する以前から、とくにジュリアン・グラックに焦点をあてて、ワーグナー受容のありかたと実作への影響について研究を継続してきた。博士学位請求論文や単著論文等で、観劇体験や台本読解を通じた直接的受容にくわえて、ボードレール、マラルメ、ニーチェなどのワーグナー論を通じた間接的受容に着目し、それらとの比較からグラックのワーグナー受容の特異性を明らかにした。また、こうした観点から『アルゴールの城にて』(1938)、『陰鬱な美青年』(1945)、『シルトの岸辺』(1951)、『森のパルコニー』(1958)、『半島』(1970)などの作品のあらたな解釈を提示してきた。とはいえ、これらの研究では、ワーグナーの芸術に見られる宗教性・政治性とグラックの文学の関係が盲点になってきたとの反省が生じた。この点に関するグラックの思考を精査し、ジョルジュ・バタイユの著作などとも関連づけながら、20 世紀後半におけるグラックの特異性を位置づけ直す必要が感じられた。

アラン・ロブ＝グリエとワーグナーの関係に着目するに至ったのは、2013～2015 年度にかけて実施された科研費・基盤研究(B)「現代フランス小説 第二次大戦および戦後の記憶の再編成の視座から」(課題番号:25284064)に研究分担者として参加し、1980 年代から現代にかけての主要なフランス小説作品の読み直しをはかっていたときである。「ロマネスク」三部作と銘打たれた「自伝的」作品、すなわち『戻ってくる鏡』(1985)、『アンジェリックあるいは蠱惑』(1988)、『コラント最後の日々』(1994)では、ワーグナーの《ニーベルングの指環》が、説話の重要な生成因子であることが明示されているばかりでなく、「作家」という存在をめぐる理論的言説が、ワーグナーを参照しつつ展開される。その過程で、ワーグナーの美学思想とナチズムの政治思想の関係も批判的に言及されている。ロブ＝グリエの作品においてワーグナーがこれほどの重要性をもちながら、しかし、これをきちんと検証する研究は、日本はおろかフランスでも不十分であった。

2. 研究の目的

本研究は、20 世紀後半のフランス文学へのワーグナーの影響を、比較文学的な視座から跡づけようとするものである。とくにジュリアン・グラック、アラン・ロブ＝グリエ、さらには《ヌーヴォー・ロマン》の作家たちの著作に焦点を絞り、各作家の特異性に応じたワーグナー受容のありかたを探る。同時に、フランス 19 世紀末以来の文学的ワグネリスムの伝統のうちこれらの作家たちを位置づけなおし、その継承と断絶の両側面を明るみに出す。ワーグナー受容というプリズムを通して、上記の作家に代表される戦後フランスの文学・芸術・思想の特徴を、時代性と地域性との関連づけながら照らし出すことが、本研究の目的である。

ジュリアン・グラックについては、本研究課題に着手する以前の研究の延長線上で、それまで十分には論じてこなかった諸問題を検討する。それは、ワーグナーの芸術に見られる宗教性・政治性とグラックの文学の関係であり、また第二次大戦への従軍体験がグラックのワーグナー受容と実作におよぼした影響である。グラックがワーグナーのなかでもとくに注目する作品が「舞台神聖祝典劇」と銘打たれた《パルジファル》であることから、近代芸術の祭儀性および宗教性

に関するグラックの思考を詳細に検討し、ジョルジュ・バタイユらの著作とも関連づけながら、20 世紀後半のワグネリアンたるグラックの特異性を明らかにする。

アラン・ロブ＝グリエについては、現在までのロブ＝グリエ並びにヌーヴォー・ロマン研究の成果を踏まえつつも、「ロマネスク」三部作を中心に、《ニーベルングの指環》四部作の影響とその超克のありかたを検証し、ロブ＝グリエ研究にあらたな展望を切り開く。そのさい、《指環》四部作の演出において時代を画した 1970 年代のパトリス・シェローによるパイロイト上演と関連づけることもめざす。

さらには、グラックとロブ＝グリエ両者において、「引用」や「書き換え」といった創作手法が見られることから、そうした手法による説話の構築技法ないしは解体技法にも光をあてる。この観点から、両者およびその他の同時代作家を比較検討し、20 世紀後半のフランス文学を特徴づける「物語（神話）の脱構築」という現象をあらためて考察することも、本研究の目的である。

3. 研究の方法

まずは伝記的な側面から、グラックとロブ＝グリエの両者におけるワグナー受容を跡づけた。そのために、二次文献のみならず作家自身が残した証言などの一次文献を精査した。多くの書籍を入手したほかに、海外をも含む各地の図書館や資料館におもむき、インタビュー記事や雑誌記事等も含む諸資料を収集・閲覧した。

また、両者のワグナー受容とその表現のありかたを、アドルフ・バーナード・ショー、アラン・パディウらのワグナー論と比較検討し、思想史上の「ワグネリズム」のうちに位置づけようところをみた。さらに、20 世紀後半のフランスにおけるワグナー受容史や上演史とも関連づけようところをみた。この観点において、20 世紀後半のフランスのワグネリズムにとって画期となったのは、ひとつには 1951 年のヴィーラント・ワグナーによるパイロイト音楽祭復興と「新パイロイト様式」の確立、もうひとつは 1976 年から 1980 年にかけてのフランスの演出家パトリス・シェローと指揮者（作曲家）ピエール・ブーレーズによる《ニーベルングの指環》四部作のパイロイト上演であったように思われる。前者については、グラックが雑誌に批評記事を掲載しており、この批評記事をくわしく読み直すことで、グラックのワグナー受容のありかたをより明確に跡づけた。後者については、ロブ＝グリエが、シェローとブーレーズによる新演出を意識して「ロマネスク」三部作を執筆したという仮説を立てた。これらワグナーの受容史・上演史上の変遷と作家の創作の接点を、文献資料の収集・解読によって検証し、また視聴覚資料によっても精査した。

こうした広範囲にわたる資料の読解作業にもとづいて、グラックとロブ＝グリエ両者のエッセーや小説作品を、従来の研究にはなかった新たな視座から分析・解釈した。とくにロブ＝グリエについては、『アンジェリックあるいは蠱惑』の翻訳作業を進めながら（未刊行）テキストを精緻に読解できたことも大きい。

4. 研究成果

アラン・ロブ＝グリエに関しては、研究成果として学会発表 1 件（「ヌーヴォー・ロマン的リライトの機制——ワグナーを引用するロブ＝グリエ」）を実施したのにくわえて、論文 2 件（「アラン・ロブ＝グリエ《ロマネスク》三部作におけるワグナーの引用をめぐる」「鏡の書法、あるいはヌーヴォー・ロマン的リライトの機制」）を公表した。これらの研究では、とくにロブ＝グリエの《ロマネスク》三部作、すなわち『戻ってくる鏡』『アンジェリックあるいは蠱惑』『コラント最後の日々』の、ワグナー言及箇所を分析した。さらにワグナーの作曲技法がロブ＝グリエの《ヌーヴォー・ロマン》的な叙述作法のモデルになりうることを確認したうえで、《ロマネスク》三部作の中心的な逸話は、ワグナーの《ニーベルングの指環》四部作の書き換えから成り立っていることを明らかにした。《ロマネスク》三部作では、《指環》四部作は、人間の歴史的な生成過程の寓話として読み解かれている。こうしたワグナー受容には、主としてコジェーヴを経由したヘーゲルの弁証法的な歴史哲学からの影響が認められる。こうした弁証法的な歴史観は、ロブ＝グリエの小説史観に通じており、さらにはテキスト生成の機序にも関わっていることを解明した。

ジュリアン・グラックに関しては、研究成果として論文 1 件（「ジュリアン・グラックと敗者の想像力——敗戦文学としての『森のバルコニー』」）を公表した。この研究では、ワグナーの《パルジファル》の冒頭詩句をエピグラフとして掲げ、またワグナーへの直接的言及も多く見られる小説『森のバルコニー』（1958）に焦点をあて、この作品の集中的な読解をこころみた。

『森のバルコニー』は、第二次大戦、とりわけ「奇妙な戦争」と呼ばれた仏独戦線における作者グラックの従軍体験を反映させた小説である。まずはグラックによる従軍体験への言及のあり方を、ドイツ人作家ゼーバルトの『空襲と文学』やアラゴンの小説『レ・コミュニスト』、あるいはサルトルの回想録などとも比較しながら検討し、そこに敗戦による心的外傷が露頭しているとの解釈を提示した。そのうえで『森のバルコニー』を、作者の没後に刊行された遺稿『戦争手稿』（2011）と突き合わせながら読み解いた。こうした読解にもとづいて、『森のバルコニー』を「敗戦文学」と規定したうえで、敗戦体験による集合的な、また作者の個人的な心的外傷の描出のあり方が、グラックがそれまでワグナーの《パルジファル》の書き換えを通して強調して

いた「傷」のテーマに接続することを論証した。

その他の研究成果として、グラクとロブ＝グリエがともに創作において依拠する「引用」や「書き換え」の手法に関して、同時代の作家ミシェル・ビュトールに即して学会発表1件（「ビュトールの批評的エッセーにおける引用の機能」）を実施した。ビュトールに関しては、音楽論やオペラ論も含む批評集成（『レペルトワール』）の一部を翻訳刊行した一方、ロブ＝グリエやグラクについての証言を含むフィリップ・ソレルスの自伝『本当の小説 回想録』を翻訳刊行したことも研究成果のひとつである。本書は、20世紀後半のフランス文学に大きな足跡を残した前衛作家の視点から20世紀後半のフランスの文化・社会・政治的状况を跡づけており、フランスの作家たちのワーグナー受容を思想史の観点からも考察しようとする本研究課題においても、重要な文献資料であることを申し添えておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三ツ堀広一郎	4. 巻 12
2. 論文標題 ジュリアン・グラックと敗者の想像力 敗戦文学としての『森のバルコニー』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 FLS言語文化論集POLYPHONIA	6. 最初と最後の頁 35-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三ツ堀広一郎	4. 巻 第10号
2. 論文標題 アラン・ロブ=グリエ《ロマネスク》三部作におけるワーグナーの引用をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 FLS言語文化論集POLYPHONIA	6. 最初と最後の頁 101-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三ツ堀広一郎
2. 発表標題 ビュートルの批評的エッセーにおける引用の機能
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2021年度春季大会 ワークショップ「『レベルトワール』を読む」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三ツ堀広一郎
2. 発表標題 ヌーヴォー・ロマン的リライトの機制 ワーグナーを引用するロブ=グリエ
3. 学会等名 公開シンポジウム《引用の文化史 フランス中世から20世紀におけるリライトの歴史》（白百合女子大学）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 ミシェル・ビュートル(著)、石橋正孝(監訳)、三ツ堀広一郎、荒原邦博、中野芳彦、他(訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 幻戯書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 レペルトワール [1964]	

1. 著者名 ミシェル・ビュートル(著)、石橋正孝(監訳)、鈴木創士、三ツ堀広一郎、福田桃子、他(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 幻戯書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 ミシェル・ビュートル評論集 レペルトワール	

1. 著者名 篠田勝英、海老根龍介、辻川慶子(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 384
3. 書名 引用の文学史	

1. 著者名 フィリップ・ソレルス(著)、三ツ堀広一郎(訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 344
3. 書名 本当の小説 回想録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------